



朝日の注ぐ通路を、王の側近であるアダルは足早に進んでいく。

我が王は朝が弱い。

そういうアダルも四十路を迎えた今、早起きが苦手になってきていたので、ほんの数分寝坊してしまい、こうして焦っているのを王を責めることなどできない。

突き当たりの部屋の前で足を止めて、扉を数回叩き、声を張り上げる。

「シルヴィオ様あ！ 朝でございます！ 起きて下さい！」

アダルは王に中に入ると命令されているので、あくまでも部屋の前で声を上げて起床を促すだけだ。

何度も声をかけるとようやくうなり声が聞こえてくる。

さっと前から離れた瞬間、轟音と共に巨大な扉が開かれて王は姿を現した。

「くはああ」

欠伸をする声の主はがつしりとした肉体を持つが、天井に届きそうな程の長身の所為ですらりとした印象を与える。

ぐぶううううつ

「くひいいいいつ!」

ペニスがシルヴィオの口の中に包まれて、その肉壁の感触と熱さに翻弄されるまま、アダルはあつという間に絶頂してしまう。

「ああおおおつ♡」

ドプリッ!!

「ん……」

口の中に精液を放たれたシルヴィオが、小さな声を出すと喉をごくりと鳴らす。

飲んでしまった。

「し、シルヴィオさま!」

「早いな、そんなに良かったか? なら、今夜は愛撫をしようとしてやるよ」

「え」

ニヤニヤ笑う顔は意地悪で、その声はやたら甘く、アダルは心臓がうるさくて瞳を閉じた。

「へ、へいかあ」

「明日は早速お前の行きたい場所に行くぞ……そこでお前がどこまで俺との性交にたえられるか試してやる」

「……っ!」

——それは、どういう意味ですか!?

その言葉は、再びペニスをいじり始めたシルヴィオの指使によって飲み込むしなくて、アダルは快楽に身もたえるしかなかった。

シルヴィオと共に舟から降りたアダルは、シルヴィオをとある場所へと案内する。

田舎町の、小高い丘に建てられた一軒家。

築十年ほどだが、町の人間に管理を任せてあるので綺麗に保たれていた。

「久しぶりですアダル様」

「ああ。連絡できず、申し訳ない」

「いえいえ」

アダルは管理人から鍵を受けとると、丁寧に玄関の鍵穴に入れてゆつくりと開ける。

二オイがこもっておらず、掃除が行き届いているのがわか

る。

アダルに続いて、シルヴィオが部屋の中に足を踏み入れた。

「玄関もだが、天井が高いな」

「あ、はい」

その言葉にアダルは気まづくなり、目を泳がせた。

ここまで来て秘密にするわけにはいかない。

そつとシルヴィオの手を引いて、各部屋を無言で見せていく。

居間、浴室、寝室、どの部屋も天井が高く、長身のシルヴィオでも余裕で身動きが取れる広さだ。

特に寝室の寝台を見て、シルヴィオに指摘されて戸惑う。

「これは明らかに、二人分の広さがあるな」

「は、はい」

「ここで結婚生活を考えていたのか？」

「実はですね……」

アダルは淡々と話し始めた。

十年程前、側近として務める事になり、シルヴィオの傍で

日々を過ごすうちに、あらぬ妄想を繰り広げた結果、気付け

ば家を建てていた。

——いつか、シルヴィオ様とここで生活を。

「今思えば、何を考えていたのかわかりません」

「……そうか、ここに俺とこれと良かったか？」

「は、はい！ それはもう、夢のようですよ!!」

アダルは激しく頷きながら叫び声を上げた。

思わず大きな声を出してしまい、両手で口を塞ぐと顔を振る。

「す、すみません」

「ならちようどいいな」

「……」

シルヴィオがどんな意図を持ってその言葉を吐き出したの

か、もう聞くまでもない。

アダルはきつく目を閉じて、意を決すると口を開く。

「じゅ、準備をしまするので、こちらでお待ちください」

先に風呂で準備を済ませたアダルは裸で寝具にくるまり、

シルヴィオが風呂から上がるのを寝室で静かに待つ。

物音一つしない部屋の中とは裏腹に、アダルの心臓はバク

バクとうるさくてたまらない。

——陛下と身体を重ねるのは初めてではないのに、な、何故こんなにも緊張するのだ!?

気になっているのは『試す』という言葉だった。

それは、アダルがシルヴィオを満足させる事ができるのか、という事なのだろうか。

不安にさいなまれ、今更ながら逃げ出したくなる。

だが、残酷にも寢室の扉は勢いよく開かれてしまった。

「アダル、待たせたな！」

「ひっ」

シルヴィオは全裸でずんずん寝台へ歩み寄ってくると、有無をいわずアダルに覆い被さり、首元に吸い付く。

ぢゅううううううっ

「ほっひっいいいんっ♡」

びくびクンと身体が跳ねてあらぬ声を上げてしまうが、恥ずかしがる隙もなく、シルヴィオの舌と指に翻弄されてしま

う。  
アダルがどれだけ「待つてください」と懇願しても、食べ

られそうな勢いでまさぐられる。

体中に口づけをされて、四肢がびくびくと震えて、快感で思考が麻痺した。

——ああっ……こ、こんなっ……い、しきが、とぶうっ…

…っ♡

頭を撫でられ、頬にくちづけをされ、体の芯から甘くしびれていく。

「はうんっ♡ ふ、はああ……♡」

「そろそろ、下もかわいがつてやろう」

「ひっ」

ぐるんと体を反転させられ、うつぶせになり、尻を高くあげる体勢を強いられる。

自分のペニスに、期待ですでに勃起しているのを自覚して呆れた。

「私は、本当にシルヴィオ様が好き……っ!?」

「力をぬけ！」

腰をつかまれたかと思うと、早急な動きで極太の肉棒を、尻の奥深くへと埋められた。

アダルは魚のように全身を震わせて、はしたなく喘いで舌を突き出してしまふ。

「ほひいゝっ♡ ひいいっ♡」

両手で敷布をつかみ、のけぞって視線が泳ぐ。

尻が、腹がすさまじく熱くて……。

——あっぱくされりゆううっ♡

きゆうきゆうっ

と愛しい男根を肉壁でしめつけ、快感の波に飲まれて泣きじゃくる。

「くひいっ♡ あおおっ♡」

「まだまだこれからだぞー！」

「は、はひいっ♡」

苦しい程の快楽に、アダルの理性は耐えることはできなかった。

気づくと白濁まみれにされたアダルは、シルヴィオに身体を擦り寄せて甘えていた。

「んう……しるヴいおさまあ……っ♡」

「お前にしてはたえたほうだな、ルアだった時より、感じや

すくないか？」

「んふえっ♡」

アダルの腹はシルヴィオに吐き出された精液でぱんぱんに膨らみ、今にも口から溢れそうになるが、汚されるくらい愛された現実には満たされていた。

膨らんだ腹を優しく撫でられると、強く押され、口からゆっくり白濁を吐き出す。

「むぐえっ♡ ふえっ♡」

「いい子だ」

シルヴィオの優しく欲望が滲む声に、アダルは心底幸せを感じていた。

——ああ……なかまで、しるヴいおさまのでえ……いっ

ぱいっ♡

もう我慢できなかった。

アダルの側近としての誇りや、人としての理性は剥がれ落ち、ただ愛する者をむさぼる雄が顔を出す。

ガバツと起き上がり、シルヴィオを押し倒した。

「んおっ？」